

---

# 臆病な花と孤独な月

蜃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

臆病な花と孤独な月

### 【Zコード】

Z8704U

### 【作者名】

蜃

### 【あらすじ】

臆病ゆえに何もかも諦め、ただ平穀な暮らしを求めて後宮へ入ったレティシア。その性格ゆえに寵を争うこともなく静かに過ごしてきたりが、ある夜から皇帝に求められるようになり、望まぬ生活を送ることになる。逃れたいと思いながらも愛してしまったために苦悩するレティシアの物語。

## 一、夜の邂逅

私は愛されることなんて、期待しておりません。

自分がそこに存在していること。

それが家の役に立つのなら、私は……後宮へ参りましょう。

笑顔で並べた言葉たち。

そのときから、彼女はひとりぼっちになつた。

けれど、それでいいとも思った。

願いも望みも、彼女には必要なかつた。

ただ、その場所から逃げ出したかつただけだったから。

穏やかな夜。夏特有の花の香りが、中庭から漂つてくる。テラスに出て顔に風を受け、とろりとした暗闇の先にあるだらう花木に視線を向ける。

「つづらと、白い花が浮かび上がるさまは美しかつた。

「レティシア様、そろそろお休みになられてはいかがですか？」

専属の侍女宮のエルバが声を掛けてくれた。レティシアは振り向いて、静かにほほえむ。手に持つた燭台の炎が、風にゆらりと揺らめいた。

「そうね、じゃあ休みます」

大人しく答え、レティシアはテラスから部屋へと引き返した。やや手狭な室内には、寝台と衣装箱、鏡台に書きもの机などがひしめきあつている。帝国の側妃の部屋の中では、もっとも小さい部屋だ。

レティシアはあえてこの部屋を選んだ。

理由は、ここが最も後宮の隅に位置し、目立たないからだつた。

やがて、ヘルバが出て行く音がし、レティシアはふたたび夜の庭に目を向ける。耳をすませて、完全に足音が遠ざかるのを聞いてから、またテラスへと足を向けた。そこから、一步外へ出る。

夜の散歩だ。

側妃たちは後宮内でさえあれば、個室でない限りどこへでも好きに行けるのだが、昼間出歩けば、どんなことになるのか、考えただけでも恐ろしい。なので、息抜きに出歩くのは夜と決めていた。

ふらふらと、薄い寝間着姿で歩きながら、香りを放つ花を探す。

他の側妃に比べれば、あでやかさには著しく欠けるが、レティシアは決して醜い娘ではない。

また、厳しくしつけられた優美な動作が、何の飾りもない姿であつても、彼女を夜の妖精のように見せていた。

長い、腰まであるけぶるような金の髪。まだ幼さを残す顔立ちで、

丸みのある金色の瞳。体つきは小柄で、肉づきはせせび良いほつではないが、女性らしい曲線は持っていた。

レティシアは中庭に作られた美しい花園に入り込んでいく。

夏の夜。この時期は花がたくさん咲いている。夜にしか開かない花も植えられているので、それを楽しみにしていた。やがて、白い花の側までくると、自然と顔がほころんだ。

鼻を近づけて、香りを胸一杯に吸い込むと、なぜかこの世の憂いを忘れられた。

「ここにいるのは誰だ？」

ふいに、後ろから声がかかった。低い、男性の声。レティシアの心臓は早鐘を打ち始めた。警備兵だらうか。ちゃんと顔を見せれば大丈夫。そう言い聞かせて、振り返った。

「……陛、下？」

「お前は確か、バルビエーリ伯の娘だったか？」

返ってきた答えに、レティシアは驚愕した。覚えられているとは思つても見なかつた。忘れられていてもおかしくない。なにしろ、会つたのはここに来た最初のみ。しかも、それは三年前だ。

「は、はい」

「ここで何をしている……と聞くのも変か。久しく顔を見ていなかつたが、元気そうで良かつた」

「ありがとうございます」

レティシアは必死に礼を言つ。まともに顔を見られない。

それでも、少しだけ目を向けて見やる。この国の皇帝は、まだひどく若い。先代の皇帝を戦乱で亡くしたために、まだ少年であった彼が帝位につくしかなかつたのだ。

レティシアより少し色の薄い金の髪は、肩口までの長さがあり、適当に束ねられていた。切れ長の瞳は、淡い灰青色。肌は白く、体格は男性の平均より細いが、鍛えられており、贅肉はついていない。今は、楽な濃い青色のガウン姿だ。足もともサンダルを引っかけただけ。とても皇帝の姿とは思えない。

「花を見ていたのか。たまには、ここにも来てみるものだな」

言つて、彼は淡く笑つた。それが珍しいことなのは、すぐにわかつた。彼は滅多に表情を崩さない。例え、敵の将ことじめをさすときであつてもだ。

「やう、ですか」

何を言つて良いのかわからず、レティシアは言葉に詰まる。皇帝は、しばらくの間黙つていた。レティシアは、どうすることも出来ず、ただぼんやりと花を見たり、月を見た。ぽつかりと半月が浮かんでいる。

時折、風があつと吹き抜けていく。舞い上がる髪と服のすそを押さえながら、思考からさまざまなことを閉めだす。そうしないと、

「ここから逃げだしてしまいそうだ。さすがにそれをしてはダメだ、と本能が言っている。

庭には、昼の熱気の残滓がただよっていた。それを感じながら、少しづつ、心を閉じる。だが、閉じる寸前に、質問が矢のように飛んできた。

「まだ、私が怖いか？」

「……あ、あの。はい」

正直に、答えた。遠くから、鳥の鳴き声が聞こえる。

「そりゃ……」

隣で、頭ひとつ以上大きい体が動いたのを感じ、レティシアは身をすくませる。つかまれたのは、右の手首だった。そのまま持ち上げられ、レティシアは真っ向から皇帝、アルバーンと目が合つ。

心を刺し貫くような鋭い眼光。整った美しい顔立ちが、月光に照らされて視界にひろがる。

次いで、手首に温かな感触。レティシアは大きく目と口を開いて、目の前の光景に驚愕した。アルバーンの唇が手首に吸いついていた。あまりの驚きにレティシアは動けなくなる。

「な、何を……？」

答えは返つてこず、手首に口づけたままレティシアの目を見てくる。その視線に込められた熱を、感じてしまった。それが伝わった

かのよつて、レティシアの顔が熱<sup>ほて</sup>る。

やがて、唇が離れると、大きな手が伸びてきて、後頭部に触れた。力強い手で頭を引き寄せられ、抱きしめられる。頬に押し当てられた剥き出しの肌は、とても熱かった。

背中に、手が下りてくる。レティシアは、恐怖から小刻みに震えた。このまま、寝所へ連れて行かれるのだろうか。そう思ふと、どうしようもない思いに襲われる。

行為 자체が恐ろしいというよりも、その結果に、レティシアは怯えた。例え嫌だと言つても、レティシアに拒否権はないのだ。ここでは、誰もが皇帝のしもべなのだから。

だが、アルバーンはそれ以上何をするでもなく、ただじつと抱きしめつづけた。

レティシアは困惑したが、しばらくなつていると震えが収まつてきた。それでもなお、彼が腕をほどくことはなく、かなり長い間、じつとしていた。

抱き込まれてしまふと、レティシアには何も見えない。ただ花の香りと、アルバーンの匂いを感じるだけだ。

どれほどのかきが過ぎただらう。

アルバーンが、よつやく腕のこましめを解いてくれた。

「長いことじだめてしまつたな、もう眠いだらう。部屋へ戻るといい……」

「え、あ……はい。陛下、おやすみなさいませ」

レティシアは、困惑したまま慌ててそこから立ち去る。いつたい、何だったのだろう。歩きながら、レティシアは振り返りたい衝動と戦つた。見てしまいたくない。

その感情が芽生えるのが恐ろしくて、レティシアは急いで自室へと戻り、早々に寝台に横になると目を閉じた。だが、その晩はまったく眠ることが出来なかつた。

## 一、正妃の資質

この国、コルフニア帝国の法が変わったのは、先々代の皇帝の御世の頃。

その時、地方に遠征していた時の皇帝が、ある導師と出会ったことにより、唐突に宗廟替えを宣言したのだ。皇帝の信仰はそのまま国家の信仰であり、国民の信仰となる。

当然のことながら、帝国内は荒れた。

新しい信仰を受け入れられない貴族や、民衆たちだけでなく、皇族内部も分裂。内乱が起こって国は疲弊した。

結果として、国土をかなり縮小してしまったものの、皇帝の望んだ通り、今までの信仰は捨てられ、新しい教えがひろめられることが、突如として一夫多妻制になつたのである。

そして、その教義の中に、夫となる男性は、その財力によつてめどる妻の数が定められるというものがあった。つまり、一夫一婦制が、突如として一夫多妻制になつたのである。

最初のことは、むりやり別れさせられたり、多く妻を娶りすぎてしまつたりという混乱があつたものの、今では落ち着いている。

もちろん他にも変わつたことはたくさんあつたが、それひとつとっても分かるように、国が落ち着くまではかなりの時間がかかった。そして、国が新しい法と信仰になじんだ頃には、ときの皇帝はすでにこの世を去つた後だった。

朝の定例会議が終了し、アルバーンは小さく息をついた。正直、まだこの空氣にはなじめない。長いこと戦場を飛び回っていたせいか、宮殿の空氣がどこか淀んだもののように思えた。

実際、ここで日夜ぐり返しかわされるのは臣下たちによる権力の掌握と、保身に満ちた欺瞞の言葉ばかり。それもいたし方ないことのように思えた。

やがて、朝議も終わり、解散のための声をあげようとしたとき、内大臣から声が上がった。

「陛下、少しよろしいですか」

「何だ、申してみよ」

「はい、それでは。陛下は即位されてもう十年近くになりますが、一向に正妃をお迎えにならない。ここ数年は色々とありましたゆえ、口をせしはせむのを控えておりましたが、國の落ち着いてきた今ならば、その理由をお伺いしてもよろしいのではないかと思いまして

な

非常にまわりくどい言い方で彼は問う。アルバーンは苦笑した。確かに、内大臣の言うとおりだ。しかも切りだされた場がまたいやらしい。

重臣たちの前では、はぐらかす訳にもいかない。

朝議に用いられる会議場は、長方形に長く、その中央に橈円形の円卓が置かれている。席についているのは、すべてこの国を支える重臣たちばかりだ。彼らのほとんどはアルバーンとは親子ほども年の差のある老臣であるが、中には三十代、四十年代の者も混じっていた。

彼らの視線を一身に受け、アルバーンは問う。

「私が考える正妃の資質について、知りたいというのだな」

「はい、ぜひ。お伺いした上で、陛下のお望みの女性を何人か選ぼうと考えております」

つまり、国が落ち着いているこの時期に、どうしても正妃を迎えるといふことらしい。アルバーンは、頬に手を当てて、微かに苦笑した。彼らの気持ちもわからない訳ではない。だから、答えた。

「まず、健康であること。性格が穏やかであること。そして、王家や大貴族が後ろについていないこと。そして、私の好みの女性であること、以上だ」

良く通る声で、アルバーンははつきりと告げた。だが、聞こえなかつたのか、意味が通じなかつたのか、大臣たちは「ことじ」とくきよとんとした顔をしている。

質問をした内大臣でさえ、妙な顔になつていて。しかし、アルバーンはもう一度言つことはしなかつた。それから席を立つ。そんな彼を引きとめるよつに、ようやく内大臣が言った。

「何をおっしゃいます！ 側妃ならござ知らず、正妃は他国の王女や皇女、大貴族の令嬢を迎えるのが慣例ですぞ…」

「それがどうした。私はどこの国の援助、という名の脅迫を受けたくはないし、親族扱いをされ、無茶苦茶な援助を請われるのもごめんだ。大貴族の娘など正妃に迎えてみる。皇族の親族顔をされ、あらゆることに口出しし、特別待遇を迫つてくるぞ」

アルバーンは無表情で冷たく言つた。

臣下たちはその発言に否やを言えずに、ただ困惑気味に言える言葉を探していたが、そんなものを待つ理由は、アルバーンにはない。

「正妃はいづれ私が見つける。なに、貧民から拾つてくるような真似はしないから安心するがいい。それでは、これにて解散する。明日までに、今日の議題についての各自の意見をまとめてくるように」

そういう渡すと、アルバーンはさつさと退室した。

廊下にでると、側近であり、近衛騎士隊隊長であるベルナルドがすぐに背後につき従つ。宮廷内であるため、わずらわしい金属鎧はつけておらず、鎧帷子の上に貫頭衣をまとった姿だ。いつ戦いになつても良いようにならぬが、こつして暑い中で見ていると実に暑苦しい。

一方のアルバーンは、全体的にゆつたりした砂漠民のするような服装の上に、金糸銀糸を用いた上着をまとい、首や腕に、宝石をあしらった装身具を身につけている。全身を覆いながらも、肌と布地との間に空間があるので、見た目ほど暑くはないのだ。

「聞こえていますよ。あの大臣たちを黙らせるとば、さすがは陛下」

どこか楽しそうな声に、アルバーンは肩をすくめた。

「そうか」

「ええ、期待を裏切らない言葉でした」

「それなら黙つて護衛をしない」とある「」と思いつ出せせる必要はない

アルバーンは冷たく言つて、さらに進む。向かっているのは鍛錬場だ。戦乱が収まつたとはいえ、いつ何時、情勢が変化するかわからぬのだ。自身の感覚と体力を落とす訳にはいかない。ゆえに、アルバーンは日々の鍛錬を欠かしたことになかった。

背後から小さな笑いが聞こえたが、聞こえなかつたことにした。

ベルナルドはいつもこうだ。彼とは様々な因縁があるのだが、騎士としての実力や出自など、申し分ない資質を備えていたため、近衛隊長に抜擢した。ただし、向こうはそのことを喜んではいなかつたが。

からりと晴れた空を見上げ、アルバーンはふと昨夜のことを思い出していた。

アルバーンとて、健全な若い男性である。時には女性の欲しい夜もある。だが、幼少時からの経験のせいか、彼には後宮に良い印象を持つていらない。そのため、そういう気分の時は、こつそりと夜の街へ繰り出し、高級娼婦を相手にすることが多かった。

理由は、計算が透けて見えるため楽しくないと、妊娠させた場合が面倒だからだ。

妖精が舞い降りたかのようだつたな。

口にするどころか、思うのも恥ずかしいことだが、そう見えたことは事実だつた。振り返つた顔を見て、そういうえばと思いだした名を言つたら、ひどく驚いていた。あの娘のことは、他の側妃とは異なり、記憶に残つている。後にも先にも、あそこまで怯えられたことはなかつたのである。

そのときは、戦いに次ぐ戦いで、日々昂ぶつていたせいだろうかと考えたが、あれはもともとそういう気質の娘らしい。

震えていたな。

昨夜、日中の暑さにうんざりし、涼を求めて気まぐれに中庭に入った。夜ならば、他の側妃に追われることもなかろうと想つていたところに、いたのだ。

彼女は、初めて寝所へ呼んだ側妃だつた。他の地位ある貴族出身の者たちとは違い、下級の貴族の出だつたから呼んだのだ。外見が好みだつた、ということもある。

今宵も、いるだろうか。

そう思つたものの、恐らいくらいという確信があつた。まるで小動物のようだ。もしいなくとも、部屋を訪れればいい。アルバーンは皇帝。この国の最高権力者であり、向こうは側妃という立場だ。拒むことはできない。

不可思議なことに、アルバーンは彼女に会つて話をし、その体に触れたいと心から感じていた。

富廷で生き抜くために、あらゆる感情を殺し、人間の汚さと醜さを見続けてきた。その中で、特定の誰かを求めようという気も消えた。はすだつた。

この感情を確かめるためにも、何度か会う必要がある。

鍛錬場へ向かいながら、アルバーンはふと心が浮き立つている気がし、首をかしげながら、何なのだろうと自身に問い合わせたのだった。

## 二、悲劇の歌

レティシアは寝具にぐるまつて、部屋から外へとつづくテラスを眺めていた。

この国、コルフニア帝国は温暖な国だ。しかも、季節は夏であり、屋外で寝ても風邪をひくことはないし、むしろその方が快適に過ごせる。庶民はこの時期、屋上などで眠ることもあるという。雨が少ないからこそ出来ることだ。

そのため、宮殿も全体的に壁が少なく、天井は太い石柱で支えられており、古代の宮殿に近い造りをしていた。レティシアの部屋も、小さいながらも風通しが良く、南側には小ぢんまりしたテラスがある。

そこからは中庭にすぐに行け、噴水や池の側で涼をとることも出来た。

時刻はすでに夜。昨夜、花を見に出かけた時間だ。本当なら、今日も行くはずだった。けれど、恐ろしくて体が動かない。皇帝アルバーンが、毎日来るわけがないと何度も言ひ聞かせてみても、無駄だった。

興味を引いてしまつただろうか。

そうでなければいい。レティシアは目を閉じて、ただ祈った。どちらにせよ、自分は他の側妃よりも魅力がない。大丈夫。それとも、図書室から持ってきた本を読もうか。レティシアは時折訪れる眠れない夜のために、物語の本をいつも置いていた。

英雄譚や、悲しい恋の物語、詩人が記した遠い神々の話、父なる神と人が歩んできた道を記した話などなど……。それらの情景を頭に思い描き、自分の今を忘れるのだ。

レティシアはまとわりつく脣間の熱氣から逃れるように、小さく歌を歌つ。

「その娘の髪は濡羽色、瞳は輝く黒真珠。

美しいは世の果てまで響き、女神が娘に嫉妬した。

さあ、誰かあの娘を殺しておしまい。

そうすれば、私の愛を捧げましょう。

女神の言葉に答えたるは麗しき若者。

彼は旅立つ、娘を殺しに。

やがて若者は娘のもとへ辿りつく。

女神の愛を勝ち取るために、娘へ向けて弓を引く。

その目に映るは美しい王女。

刹那の後に、若者は恋に落ちた。

彼は女神から娘を守ると誓い、同時に策を講じだす……」

前半の半分ほどを歌つたとき、部屋の戸の前で音がした。レティシアはすぐに歌うのをやめ、息をひそめる。エルバを起こしてしまったのだろうか。でも、いつもであればこのくらいで起きてくれるのではないかに。

そう思つて耳をすませると、衣擦れの音がして、誰かが入つてくる気配がした。

「やはり、部屋にいたか」

聞こえた声に、レティシアは、心臓を強くつかまれたような気がした。呼吸が速くなる。寝台の上に座る気配がし、薄い上掛けが持ち上げられた。皿と口をあわせつづぶる。

「そんなことをしても、眠っていないのはわかる。起きる」

低い声が、命令した。レティシアはのろのろと皿を開けて、寝台に腰をかけた人物を見る。皇帝、アルバーンの優美な姿が、差し込む月光の中に浮かび上がって見えた。

「今日も花を見に来るかと思っていたのに、来なかつたからじちらに来た。起きてくれ、少し話をしたいんだ……酒も持つてきたし、一緒に飲むか？」

淡々としたあまり感情のこもらない声。レティシアは体を起こし、勇気を奮い起こして訊ねた。

「話……ですか。なぜ私と？」

「やうだな。理由はないとも言えるが、あるとも言える」

答えになつていかない答えを返し、アルバーンがつと手を伸ばして、レティシアの頬に触れる。指先が頬を撫でる感触に、小さく身震いした。やがて、顔が近づいてくる。その行動の意味をさとづ、思わず身を引いた。すぐに手が離れて行く。

「嫌か、私に触れられるのは」

「やういう訳では……ありませんが」

否定の言葉を言おうとするものの、語尾へ行くにつれて小声になる。アルバーーンは寝台から立ち上がり、部屋の真ん中に置かれた丸い卓に向つ。そこには、青白い月の光を映し出す銀の酒杯がふたつ、木の盆に載つてゐる。

「起きて來い」

命令。レティシアはそれに逆らつことは出来ない。寝台に掛けておいた薄物を手にして、外へ出る。虫の声がりいんりいんと草むらから響いてくる。それを聞きながら、レティシアはふたつ並んだ椅子の片方に腰を下ろす。

いつもは、自分とエルバしか使わない卓に、この国の頂点にいる人物が掛けている。ここは彼のものなのだから当然といえば当然だが、質素で、華美さの薄いこの部屋には、どこか不似合いな気がした。

「軽い果実酒だ……飲め、気分が良くなる」

「は、はい」

言われるままに手にとり、酒杯に口をつける。それは、さらりと甘く、かすかに苦味のある白の葡萄酒だった。透明度の高い高級品。家でも、このようなものは見たことがない。じくり、とのどを鳴らして、一口ずつ飲んでいく。おいしい。

「先ほど、歌が聞こえたが、あれはお前が歌つていたのか?」

「あ、はい。眠れなくて……物語のひとつを歌つておりました。お耳障りなものをお聞かせしてしまつて申し訳ありません」

あんなものを聞かれていたとは。レティシアは恥ずかしくてひるむいた。

「耳障りなどではなかつた。出来るなら、ずっと……最後まで聞いていたかつたな。そうだ、最後まで歌つてみてはくれないか？」

「え、で、でも……人前で歌うのは、苦手なのですが」

「構わない」

真っ直ぐに、射られるように田を見られ、レティシアは固まつた。嫌だなどとは言えない。彼に逆らつて、ここを追い出されるような事態だけはビリしても避けたい。

「わかりました……あの、本当につたないので、御気分を害されたらすぐにとめて下さ」

「……ああ」

レティシアは彼がうなずくのを見てから、意識を閉ざすように中庭を見た。白い百合が一輪、月下に大輪の花を広げている。そうだ、あの花に向かって歌おう。それでもしなければ、気が動転してまともに声すら出ない。

「いつものように、花に語りかかるように歌えばいい。」

レティシアは呼吸を整えて酒杯を卓に戻すと、胸に手を当てて最初から歌いだす。先ほどまで歌つていた場所にさしかかると、一旦止めて、のどを整えてからまた歌い始めた。

「娘の国には伝説が眠る。

近くの山の怪物は、乙女の肉を好むといふ。

若者は人々に話を広め、娘を差し出させるために街を回った。やがて言葉は王に届く。娘の涙が零となつて落ちて消えた。

山の古びた宮殿で、娘は静かに時を待つ。

夜になり、若者は娘のもとへと現れた。

愛しい娘を腕に抱き、若者は思いをどうづく。

姿をさらせば女神が来る。

その怒りの炎に焼かれぬよう、若者は姿を隠す。

やがて娘はみごもつて、若者の姿を知らうと動く。

若者の寝入るときを待ち、娘は明かりを手に向かう。

初めて見た怪物の美しさ。娘の心は喜びに舞う。

明りに照らされ、若者は目覚め、顔を見られてしまったことを知る。

彼は絶望から涙を流す。若者は自分の正体を娘に告げた。

そして永遠に姿を消した。

一度と戻らぬ愛しいひとよ。娘は泣いて彼を求め、子を残して後を追う。

女神は全てを知りえて泣いた。彼女は若者を愛していたから。けれどもこれで、私こそが美の女神、疑う者は、誰もいない……」

長い、長い歌だった。呼吸が少し乱れ、大きく息をする。大きな声で歌つた訳ではないが、それでも長さのせいで、のどが少し痛かつた。これほど声を出したのは久しぶりのことだった。

大きく上下する胸に手を当てていると、拍手が送られた。レティシアは驚いて、近くに座るアルバーンを見やる。昨夜と同じように口もとには微笑が浮かんでいる。

彫像のように整った顔に、ほんのりと宿った生氣。それが恐ろしいほど美しい。

「綺麗な声だつた。それにしても、悲しい話だな……」

「はい、ですが私はこの話がとても好きなのです」

「なぜだ?」

「とても、人間らしいお話ですから。愛するがために、全員が苦しむ。それがとても、愛おしくて。報われなくとも人は人を愛せるんだという気持ちになるのです。悲しいけれど、人間の美しさを歌つた歌なのだと、私は信じています」

少し、とろんとした頭でレティシアは言つた。こんなふうにアルバーンと喋ることができるのは思わなかつた。少しだけ、大胆な気分になつていて。酔つてしまつたようだ。普段、それほど酒を飲まないせいだつ。

「ああ、そうだな」

声が近い。椅子が、後ろへ引かれる音がして、顔を上げると、アルバーンの整つた顔がすぐ目の前にあつた。今度は、身を引く暇もなく、唇が重ねられる。

やわらかな葡萄酒の香りがする唇が押しあてられ、レティシアの思考が止まつた。

#### 四、その熱を…

唇は、しばらくなただ重ねられているだけだった。だが、レティシアが動かないでいると、一度唇が離れた。一瞬我に返り、思わずびくつと身を引いてしまった。

「口を開けろ」

アルバーンの言葉に、レティシアはすぐに従つた。有無をいわせぬ言葉とは裏腹に、触れる手と唇が優しかつたからかもしれない。後頭部に、大きな手が添えられ、口づけはさらに深まっていく。レティシアは頭の中が真っ白になり、同時に意識が遠くなる。

ほんやりして、何も考えられないことが心地よい。レティシアはされるがままに口づけを深めてくるアルバーンに応えた。

少しして、唇が離れる。閉じていた目を開くと、真っ向からアルバーンと目があつた。彼は、少しやましそうな顔で言つた。

「これは少し卑怯だつたな

言つてゐる意味が分からず、レティシアはただ「卑怯?」とおうむ返しに言つた。何が卑怯だつたのだろう。アルバーンはふたたび椅子に掛けると、つぶやくよつと言つた。

「ああ、怖がりせずに済むと想つたんだが

なぜかアルバーンはそこで言ごよどみ、困惑したような顔でレティシアを見た。ここへ来て見せるどの顔も、すべて初めて見るもの

ばかりだ。青い血が流れている、心臓が氷で出来ているなどと揶揄される彼の、本当の顔がそこにあるように思える。

でも、なぜ私の前でそれを見せるのだろう。

これで、アルバーンと会うのは二回目だ。心を開くような要因なんて、どこにもないはず。どちらもまだ、互いのことをよく知らないのに。

知りたい。訊ねてみなくては。けれど、訊ねても良いものだろうか。それで、アルバーンが不快な気分になつたらどうしよう。心臓が激しく打ちだした。胃のあたりが痛む。

レティシアは、ひどく緊張しながらも口を開いた。訊ねずにはいられなかつたのだ。

アルバーンが、どこかすがるような顔をしていたせいもあるだろう。彼もまた、逃げ場所が欲しかつたのだろうかと思いながら、問う。

「あの、どうしてわざわざ私の部屋をお訪ねになられたのですか？」  
「側妃の部屋に来るのに、理由などそれほどないだろ？」

アルバーンの言つ意味は、なんとなくわかつた。だが、それならなおさら納得いかない。

「だつて、他の側妃方のほうが私より美しく魅力的ではありませんか。……その、陛下を喜ばせるすべにも通じていらっしゃるでしょうし、家柄も、数を増やすためだけにここへ来た下級貴族の私など

よつも遙かに上です」

やや口ごもりながらレティシアは言つ。

実際、他の側妃を見ていると、諦めきつたことが正しく思えてくる。美人で、自分を扇情的に見せることにも長け、話術にも気を配り、全身全靈で魅力的になろうと努力している彼女たち。そのまばゆいばかりの輝きを見ていると、自分の地味さを痛感して、空しくなつてくるのだ。

「なんだ、そんなことか」

「そんなこと?」

「では、魅力とは何だ? そんなものは個人によつて感じ方も捕らえ方も全て違う。まあ、平均すればああいう挑発的な女が男にとつて最も魅力的なかもしけないが、私の好みとは違うな。それに、恐らく誰にとつても、自分の好きな女が一番魅力的なんだ」

それは言い換えれば、レティシアが好みだとこいつになると。

唚然とした思いで、レティシアは目の前の美しい顔を見詰めた。こんなに、美しいひとに好まれる価値が、自分のどににあるのか。アルバーンは酒杯を傾けて、中をほとんどからにすると、立ち上がりつて、レティシアの側に来た。

動けないでいるレティシアの耳に唇を寄せ、言つ。

「今宵、お前が欲しい。前回は怖がられたから何もしなかったが、今回はやめる気はない、いいな?」

声が、耳の中で反響しているような気がした。レティシアは、ただぐつとのどを鳴らして、頷いた。

「は……」

一の腕をつかまれ、立ち上がられると、レティシアより頭ひとつは高いアルバーンの微笑が目に映る。目がくらむような思いがした。ふたたび口づけが落とされる。吐息が口のなかで混ざり合った。濃密な葡萄酒の香りにレティシアは酔った。

やがて、大きな手が、全身を撫でるよつて撫する。

そのまま寝台へ横たえられると、レティシアはただそれるがままに、彼の熱を受け止めた。

「ほんやつと食事をとつながら、レティシアは外を見た。

良く晴れている。今日も暑くなるのだから、うんざつするほどだ。

朝、目覚めたときにはアルバーンはいなかつた。レティシアは全裸で眠つており、シーツにこびりついた血のあとが、昨夜のことが夢ではなかつたのだと物語つていた。

酒杯も消えており、いつ彼が出て行ったのかさえわからぬ。

なんとはなしに体に違和感を感じつつ、レティシアはエルバの運んで来てくれた食事をとつた。果物に、パンとあつさりした野菜スープ。もともと大食出来るほうではないので、これでも多いくらいだった。正直、あまりお腹は空いていないが、食べないとエルバが心配するので、いつも詰めこむ気分でゅうくりと食べる。

「それにしても驚きましたね。陛下はあまり後宮がお好きではないとかで、一度も側妃のお部屋をお訪ねになられたことはないんですね」

給仕をしつつ、レティシアの服を用意しながらエルバが言った。

「え、 そうなの？」

「はい。だから、これ見たときは本当にびっくりしたんですね。でも、あたしは嬉しいです。これでレティシア様が寵姫となられるんですね。うまくいけば母后様も夢じゃありませんよー！」

血のついたシーツを手に言われ、レティシアは非常に気まずい思いをしながら言つ。急いで隠そうとしたのだが、すぐに見つかって取り上げられてしまったのだ。恥ずかしくて、顔から火が出るとはこゝこことなのだとレティシアは痛感した。

「母后になんか、なりたくない」

「まだそんなことを……あたしはずつと思つてたんですよ。レティシア様みたいな方こそ、母后様にふさわしいって。他の側妃が母親になんかなつたらきっと継承権争いで大変なことになります。せつかく陛下が平和にしてくださったのに」

エルバは憤慨しながら語った。それはレティシアにもわかる。

レティシアがここに来る前まで、この国は内乱で荒れていた。コルフニアは、一民族の国ではない。多民族国家だ。小国を傘下に入ることで、他の国に領土を荒らされるのを防いできた歴史がある。

その政策により、国境を荒らされることはなくなつたが、一民族国家であれば生じないような面倒事が多数存在するようになった。

異なる文化の国を属国としているため、一国家としてのまとまりに欠ける上、中には独立戦争をはじめる国もあつたのである。

そして、ただでさえ混乱しやすい土壤がある中で、継承戦争が起つた。始めたのはアルバーンの兄三人だ。彼らは妥協することをせず、ただひたすら争つた。原因是、嫡子を決めずに世を去つた皇帝のせいであつた。アルバーンはその中で成長し、やがて長じて兄らの首を落としたのだ。

「そうね……戦争は起きないほうがいい。でも、私は母后には向かないわよ」

「そんなことありません。ああ、今日は結構召し上がりましたね、良かつた」

レティシアの手もとを見て、エルバは嬉しそうに笑つた。

彼女はレティシアとは大して年齢の違わない若い娘だ。気の強そうな顔立ちに、すらりとした体型。鮮やかな褐色の髪がくつきりした目鼻立ちによく似合つ。騎士階級出身で、レティシアが後宮入り

してからずつと、近くで仕えてくれている。他の侍女官はもつと甘い汁を吸える側妃のところへ行ってしまったというのに、彼女だけは「ひして側にいてくれるのだ。

「こつもありがとうね

「いいえ！ もて、今日も暑いでしょうから気をつけませんと、もしかしたら、すでにお子が宿っているかもせんしね」

そう言って片手をつぶり、エルバはシーツを抱えて出て行ってしまった。レティシアはその可能性を失念していたことに気づいて、呆然とした。

椅子に座つたまま、レティシアは困惑してため息をついた。

頭が混乱する。流れる時間に沈むように生きてきたからか、展開の早さについていけない。

子が出来たら面倒になる。だからといって、皇帝アルバーンを拒むことは出来ない。昨夜、まるでさがるように抱きしめてきた。その腕の感触が、まだ肌に残っている。どうしたら良いのか、レティシアはただただ途方に暮れてその日を過ごした。

やがて、また夜がやつてきた。二日連続で訪れる事はないだろう、と思っていたレティシアだったが、その予測はすぐに裏切られる。

とろとろとした眠りに揺られていたレティシアが、掛けられた声に薄く目を開けると、アルバーンの綺麗な顔がほほ笑みかけていた。

## 五、すれ違つ望み

「起きる」

眠りに落ちかけていたレティシアに声を掛けた。昨夜とは違い、本当に眠たそうに、ぼんやりと開いた瞳をのぞきこみ、アルバーンはほほ笑んだ。ここまで無防備な姿を見るのは初めてで、ひどく愛らしく感じた。

「陛下……？」

小さな声をあげ、レティシアが体を起しそうとする。だが、アルバーンはそれを押しとどめ、そつと髪を撫でた。やわらかな黄金色の髪はひんやりとしており、いつまでも触れていたい気分にさせる。

「やうだ。話が出来るようになったら起きる」

やうやくアルバーンは、レティシアの意識がはつきりするのを辛抱強く待った。昨夜は、少し性急過ぎたと彼は思っていた。こうえることの出来なかつた自分が情けない。

外から、虫が求愛する声が響いてくる。そのやわやかな声がやむと、部屋には、しんしんとした静寂が満ちた。

レティシアは、少し怯えた表情をしていたが、もう震えてはいなかつた。例え、嫌がられても、拒否されても、アルバーンは昨夜彼女を手に入れていただろう。それでも、気分をやわらげてやりたくて、じくわざかに眠りを誘つ薬を入れた葡萄酒を飲ませたのだ。

それは、役に立つたのだろうか。

やがて、アルバーンの前で、レティシアが目を覚ます。大きな金色の目が開かれ、体が強張るのが触れていてわかつた。

「起」してすまないな

「い、いえ……申し訳ありません。また来られるとは思つていなくて」

消え入りそうな声で言いながら、レティシアがゆっくりと起き上がりた。昨夜と同じ、薄く丈の長いチュニック姿だ。薄い生地のためか、体の線が透けて見える。それを目にし、どうしようもなく触れたくてたまらなくなる。

「どうして、そう思つたのだ」

「え……？　あの、私の他にも側妃はいますし、陛下は、後宮がお嫌いだと聞きましたから」

「どうか。確かに、私は後宮が嫌いだ。お前も知つてはいる通り、私の母はここで殺されたからな」

なんの感慨もなくそう告げると、下を向いていた瞳がこちらを見た。その瞳に驚きと、痛ましさが浮かぶのを見て、アルバーンは思わず苦笑した。

「もう過ぎたことだ。それに、後宮嫌いなのは他にも理由がある。私は、皇帝の寵をめぐって争う女たちの醜さを、つぶやいて見て育つたのでな」

「では、なぜここへ？」

「決まっている。お前に会うため、それだけだ」

昨夜も同じことを言った。それでも、レティシアは納得いかないようだった。アルバーンにはその反応が不思議だった。ここまで自分に魅力がないと思いこむには、なにか理由があるはずだ。それが分かるまでは、ただ辛抱強く言い聞かせていくしかないだろう。

レティシアの容姿は、彼女が思つほど他の側妃に劣るものではない。いや、見かたや好みによつては同じくらい美しい女性なのだ。ただ、ひどく目立たない。後ろに隠れて、ひつそりと咲く淡い色の花、それも昼ではなく、夜咲く花のような感じを受ける。

「私は恐らく、最初に一目見たときからお前が欲しかつた。戦乱が収まつてすぐに、大臣のひとりが気をきかせたつもりで、後宮に王侯貴族出身の側妃たちを置いたが、彼女たちの顔を見て私がどんな思いをしたかわかるか、また、下らない争いが起きたと思った」

言いながら、アルバーンはレティシアに手を伸ばし、強張つたままの腕をとつた。小柄な体がびくりと震える。それには構わず、ほつそりした手を自身の手にのせて撫でた。

「だが、その中にお前を見つけた」

レティシアは何も言わない。ただ、恥ずかしそうに顔をつむげているばかりだ。

手を持ち上げて口づけると、また体が震えた。ひとつひとつの反

応を楽しみながら、アルバーンは彼女の手を離して、今度は唇に口づける。ゆっくりと、彼女の身体から緊張の糸が抜けて行くのがわかる。

「昨夜は痛い思いをしただろ？が、これからはお前も楽しめるはずだ」

「……いえ、私は陛下が良ければそれで

「それでは私がつまらない」

深い笑みが浮かんだ。レティシアがさらに驚いたような顔をする。その顔すら愛らしく感じ、手を伸ばして抱きしめる。

「震えなくなつたな……私を恐れる必要はないんだ、いや、怖がらないで欲しい」

説き伏せるように言つ。腕の中で、レティシアが微かににうなづくのがわかつた。少しづつでいい。少なくとも、彼女はアルバーンを拒まなかつた。今夜も、拒む様子はない。

アルバーンはすつと欲しかつた花を、ようやくこの手に入れたのだ。

「こちらを向いて咲いてくれないからといって、無理に矯正をせることはない。」

何より、彼女に触れていると、ひどく心が安らいだ。彼女には打算がない。何かを欲しがる訳でもない。恐らくはそれが心休まる理由だろう。だが、このままでは一方的に自身の思いを押しつけてい

るだけになる。それでは足りない。

だが、どうすれば彼女の心が手に入るのか。やはり答えが出ないままに、アルバーンは彼女と夜をともにしたのだった。

氣だるさを抱えながら、レティシアは本から顔を上げた。今日は曇り空で、暑さが少しゆるんだので体がかなり楽だった。

あの日以来、皇帝アルバーンは毎夜のよじにやつてきてレティシアを抱くようになった。彼は、優しく穏やかに何度も名前を呼びながらレティシアを抱く。そのためか、三年前からほんの数日前までに感じていた恐怖は、ゆづくつと薄れ、今ではほとんど怖いと思わなくなつた。

彼が来ると、自然と身をゆだね、時にはこちらから触れることが出来るよじにまでなつていた。

それでも、こつして太陽のもとで部屋を見ると、やはりあれは夢なのではないかと思つてしまつ。白々とした光の中では、何もかもがあからさま過ぎて、実感がわかない。

好きだとわざやく声も、熱い体の重さも。

全て、ただの夢だつたよじに、部屋には彼のいた痕跡はほほ残つていない。けれど今、レティシアが手にしている本は、彼が昨夜こへ持ち込んだものだ。それを見ると、夢ではないのだと実感する。

彼は、ここに書かれた歌を覚えて、時々で良いから歌つて欲しいと言つた。

「私は、珍しい歌う小鳥みたいなもので……手をつけたのは、ただの気まぐれ」

つぶやいて、レティシアは嘆息した。この部屋にいるのはレティシアただひとり。エルバは侍女官としての仕事で忙しい。

広くもないのにがらんとした部屋をなんとはなしに視界に入れて、思う。

アルバーンは、朝になるといつもいない。必ず夜のうちに自身の寝室へと戻つて行く。その理由がわからないほど、レティシアは愚かではなかつた。彼は、自分がここへ通つていることを、他の者に知られないようにしてくれているのだ。

それがレティシアを守ることにつながる。

後宮では陰謀や暗殺が当然のように行われるからだ。

特に、位の低い皇帝の寵妃はそういう対象になりやすい。そこを考慮してくれているのだ。そうでなければ、レティシアなどすでに殺されていてもおかしくない。恐怖が、あらためてこみ上げる。もし、このことが他の側妃に知られたら、どうなるのだろう。

「…………どうして？」

どうして彼は、私などに興味を持ったのだろう。

少しずつ、今まで心に築いてきた壁を崩されていくのがレティシアにはわかった。好きになつてはいけない。愛してしまつたら、最後は心がたずたになつて終わるだけだ。

「ここで、静かに沈んで行けると思つていたの」

家族と貴族社会の中で生きるのがつらくて、レティシアは話を受けた。それだけだった。

レティシアには、妹がふたりいる。後宮入りの話が来たのはレティシアではなく、上の妹の方であつた。だが、彼女には婚約者がいた。妹は泣いて父にすがつた。そして、父はそこにはいた私を見て言ったのだ。

レティシア、どうせお前は一生誰にも貢つてはもらえないだろ。この話、代わりにお前が受けはくれないだろ。家族のために、後宮へ入つて欲しい……。

一斉にレティシアに注がれた視線。忘れよつもない。受けた当然、うなずかなければ、ひどい娘だとののしられ、扱いはいつそうひどくなる。そのとき、レティシアは自分の姿が地味なことに困をつけた。陰謀と謀殺がはびこる後宮であつても、もし、皇帝の目にとまらずに済めば、一生を安穏と過ぐらうことじが出来る。

何より、ここから出でこけるのだ。

その思つておは、レティシアに微かな希望をもたらした。

苦痛からの解放。

だから話を受け入れた。そのとき、母は苦しげに顔を反らした。  
母だけは、そのことを悲しんでいたようだつた。

「どうしてだね?……」

改めて、レティシアはつぶやいた。

心から、わからなかつた。なぜこんな自分が寵愛を受けるようになつたのかが。

レティシアは、自身の未来が、それまでの薄暗い明りの代わりに、強い陽光と、黒く渦巻く黒雲がたちこめるものに変化したような気がして、たまらない気分になつた。

## 六、皇帝である母

「近頃、よく後宮の側妃をお訪ねのようですね」

からかいが混じった声に、アルバーンは顔を上げた。朝だ。自室で食事をとりながら、仕事やレティシアのことなどを考えていたら、頭上から声が降ってきたのだ。

「まずは座れ。私だけだから咎めないが、他に誰かいたら首が飛んでいる」

「わかつてますよ。そんな失態はしません」

そう言つと、ベルナルドは勝手に座つて、アルバーンの皿の前に並べられた皿に手を伸ばした。特に止めない。どの道、ひとりでは食べきれない量だ。適当に余らせることで、皿下の腹へとまわつていぐ。ここで彼が食べても、後で食べても同じことだ。

基本的に、宮殿での食事は床に敷いた敷物の上に直に皿を並べ、铭々が手をのばして食べる。ここよりもう少し北にいった国では違うらしいが、コルフエリア帝国ではそれが普通だ。

今日は果物や、香辛料をふんだんに用いた肉の煮込み、発酵させないパン、乳酪の塊に、乾燥させた果物で作った砂糖菓子などが並んでいた。飲み物は、家畜の乳を発酵させ、味をつけて薄めたものだ。

「それで、ついに妃を決める気になつたんですか？ 誰ですか？」

「なぜそんなことを聞く？」

アルバーンはベルナルドの顔を見ずに言った。自分でも、声が冷たくなったのはわかっている。だが、はつきりと言つてしまつて良いものなのか、まだわからないのだ。

「そりや知りたくなるのが普通でしょ。皇帝が後宮に通つてすることなんかただひとつだ。相手の女性は将来皇妃や母后になるかもしれない訳です。その親類に顔を覚えてもらえば、後で色々と得なこともあるでしょうし……と、」じちゅうじちゅう言いいましたが、ようするに興味があるんですよ、俺は。何しろ、陛下が見染めた女性ですからね」

座るなり饒舌に喋り出したベルナルドを、アルバーンは苦り切つた顔で見た。

相変わらず人を食つたような笑みを浮かべるその顔はひどく凜々しい。潔癖な性格を現すように、茶色の髪は一部のすきもなく整えられている。アルバーンより背丈もあり、がつしりした体格ながら、まじりの下がつた目のせいが、顔立ちには甘さがにじんでおり、宫廷に住める女性たちには結構な人気があるのだそうだ。

アルバーンの護衛をしつつ、侍女官たちに色目を使っては甘い言葉をささやいたり、笑顔の大安売りをしているからわからないでもないが、時々彼女たちに、彼の本性を知つても同じ態度がとれるのかどうか試してみたくなる。

今だとて、彼はアルバーンの内心を知りながらあえてそのような質問をしてきているのだ。

苛立ちながらアルバーンは問つた。

「何が言いたいんだ、お前は」

「言いたいことは今全部言いましたよ」

「肝心なことは言つていない。私が見染めたから何だといつんだ」

煮え切らない言い方に苛立ちを感じ、アルバーンはどげのある声で問つ。ベルナルドは、パンで肉をはさんだものを食べながら、楽しそうに笑つてゐる。やがて、口の中の食べものを飲み下し、ようやくベルナルドは言つた。

「だつて陛下、女性も後宮も大嫌いだつたでしようが。そんな陛下のお心を射とめた女性。気になりますよこれは……いつぞやに言つていた条件を全て満たした上で、惹かれたわけでしょ」

「下らない。いつかは分かるだろ」……下種な詮索はやめておけ。お前にも教える訳にはいかない、今はまだめだ

アルバーンは好奇心でいっぱいのベルナルドに、釘を刺すように言つた。

「わかりました。じゃあ勝手に調べますよ」

「せうか、じゃあ給金を下げよ」……余計に働かなければ、今まで通りの暮らしは出来ないぞ

無表情でアルバーンは言つた。途端、ベルナルドの手が止まる。今にもアルバーンを殴りたいとも言いたげな顔だ。それを見ると、

自然と勝ち誇った笑みが浮かぶ。彼をやりこめるのは実に楽しい。いつも嫌みばかり口にするお返しだとアルバーンは思った。

「分かりましたよ。早く見たいな……少なくとも、俺を失望はさせないで下さいよ」

「その点については大丈夫だ。と言つても、私を良く知つているお前が後宮の面々を見れば、誰だかなどすぐにわかつてしまつだらう。もしわかつても、決して口にするな」

「了解です、我が君」

人の悪い笑みを浮かべると、ベルナルドは食事に戻つた。

そう、彼ならばきっとわかつてしまつだらう。けれど、今レティシアのことを表沙汰にはしたくない。彼女はまだ、心を開いてくれない。だが、どうすれば良いのか、いくら考えてもわからなかつた。務中はそつはいかない。

眼下に広がる離宮をなんとはなしに眺めながら、ベルナルドは暑さに閉口していた。せめてこの鎖帷子を脱げればましなのだが、勤務中はそつはいかない。

これでも軽装の方なのだ。この国は暑いために、北の国々のように金属板の鎧をつけることはない。そんなことをしたら、熱中症で兵士が使いものにならなくなるからだ。だが、それでもやはりきつい。ことに、日中の警備は……。

仕方なく、離宮の風景を眺めて、気分だけでも涼をとることにしてた。

歴代の皇帝たちが、噴水や人工の川、池などを引きこんで、少しでもこの暑さからのがれようと腐心して建造したと言われる離宮を見やる。皇帝たちはこの時期、涼しい早朝から午前中にのみ政務を行い、他の時間はほとんどすべて、妃たちとともにあそびで過ごしたのだといつ。

「全く、今の陛下にもそのくらいの人間味があつて欲しいものだな」

ぼやくようになつと、同じく護衛にあたつている部下の近衛兵と目が合つ。彼は、場合によつては無礼ともとれるベルナルドの言葉に対し、にやりと笑みを返してきた。同感だと言いたいのだといつ。なので、ベルナルドも笑み返してやつた。

アルバーンの執務室は宮殿の東側にある建物の中にある。彼は毎日欠かすことなく、きちんと政務を行つている。書き仕事だけではなく、視察などにも自ら出かける。それが正しい君主のあり方かといえば、おそらくは違うのだろうが、今はまだその必要があった。

この国を統べてるのは自分だと知らしめ、権威を保つておく必要が。

それがどれほど心身に負担を強いることなのか、護衛としてあちこち同行するベルナルドには、彼が心身ともに疲労をためていることぐらいは分かるが、それを止める気はない。倒れるのなら、それまでの人間だったということだ。

ベルナルドと同じように考へてゐる者も、この宮廷には大勢いるし、その逆に、アルバーンが皇帝位についていることが気に食わない奴らも大勢いる。様々な思惑が交錯する中で、それでも律儀に君主としての責務を果たす。それが、アルバーンという男だった。

その目が見ているのはちっぽけな世界ではなく、この大陸全体。

アルバーンは言つていた。

今はまだ強い君主である必要があるし、これからも続くことだろう。それは悪でもないし、善でもないが、私の理想は、政治といつものがこの国に暮らしている人々の生活の邪魔にならないことなんだ。それが、一番の理想形だと思っている。

そういう人間だからこそ、ベルナルドは彼の下につくことに決めたのだ。歴代の皇帝と同じような奴だったならば、この剣の切つ先が向けられていたのはアルバーンのど箇の方である。

「……はあ

ため息をついて顔をあげると、ぬけるような青空にはたなびくようく雲がわいて流れしていく。時折、大きな鳥が空を切るように飛んでいくのが見えた。

少しほんやりしていると、ここへ近づく足音が聞こえ、意識を戻す。

やつて来たのは優しげな顔をした青年だった。やや茶色みの強い金の髪に、鮮やかで纏りのない青の大きな瞳。体つきは中肉中背で、簡素だが質の良い衣服をまとっている。見慣れたその顔を見ると、

ベルナルドは緊張をといた。

青年はどこかほんわかした笑みを浮かべて、嬉しそうにベルナルドの近くまでやってくると、中音のやわらかな声で訊ねてきた。

「陛下はまだお仕事中ですか？ その、ちょっとお話をしたいのですか……」

「ああ、じゃあ声を掛けでみますよ。ちょっとお待ち頂けますか？」

ベルナルドが言つと、青年は「はい」と頷いた。それを受けてから、ベルナルドは遠慮なく執務室の扉を叩いた。中から不機嫌な声が返つてくる。

「何だ」

「フラン殿下がお話があるそうですよ。休憩がてら聞いてあげたらいどうですか？」

静寂。しばらくして、足音が響いて扉が内側から開けられた。疲れのにじむ顔で、アルバーンは言つ。

「何の用だ……また誰かが余計な入れ知恵をした訳じゃないだろうな？」

「わかりませんよ。でもまあ多分、予想から外れるとこつことはないでしううね」

言つて、首をかしげるとアルバーンはひざをついたよつて片手を額に当てた。

「自分でまいた種でしようが。ちゃんと他の雑草から守つてやらないと枯れますよ。それに、陛下はもう少し家族というものに慣れた方がいいですよ。誰だかは知りませんが、後宮の花を口説き落したいんでしよう？」

ベルナルドは笑つて、アルバーンの背中を押した。

執務室がある建物の扉は開かれ、その前にちょっと不安そうなフエランの顔が見える。彼はアルバーンの姿を見ると、子犬が飼い主を見つけたような顔をして、中に入ってきた。アルバーンは肩を落とすと、さも困ったように彼に歩み寄つていく。

その様子を見守りながら、ベルナルドはため息をついたのだった。

## 七、過去と肉親

近寄ってきたフュランの姿に、アルバーンは顔をしかめた。

アルバーンは彼のことが苦手だった。

「陛下、お忙しいのはわかつてますが、少し話がしたいのです」

「ああ、それは聞いた。それで、話とは何だ」

「はい！ 実はこの間陛下がおっしゃつておられた皇妃の資質をもつた女性とどうすれば陛下が出会えるのか、色々と考えてみたんですけど、どうせなら僕が探してさしあげればいいんじゃないかと思つて、それで、陛下の隣にふさわしいかなつて思う方についても考えてみました」

フュランは嬉しそうに言つ。皿が輝いているように見えた。

「それで、他の方にも相談してみたんです。そしたら宮殿住みの大臣の方や、官吏とか軍の上層部の方にこれは、と思う方々をたくさん紹介されて、その中から僕が選んで陛下に何人かすすめたら良いでしようとおっしゃつて頂けたので、その、勝手ながら選んでみたのですが、お聞きくださいますか？」

「……何人、選んだんだ？」

もしも羊皮紙が埋まるくらいいたら、後でフュランをけしかけた奴らを脅してやると内心思いながら問つ。フュランはちょっと困惑気味に答えた。

「ええと、三人くらいですよ」

「そうか……それならおさらば、バジエステロス将軍とボネツィイ財務長官、それにドロンソロ卿の娘あたりだろう?」

「えつー! まだ何も言つていないので、何でわかつたんですか?」

わからないわけがない。

帝位についてからとこつもの、諦めとこつ言葉を知らない彼らは、定期的に自分の娘やもしくは親戚の娘などを催し物に連れて来てはそれとなく紹介し、妻に似て美しいでしょ、陛下を一目見てずっとお慕い申し上げているのです、ビッグです、後宮の花に加えてみては、などと言つて行くのである。

少しでも隙を見せようものなら言つてくるため、アルバーンはけん制するのに苦労していた。それぞれ、官吏や軍人としては有能なのだ。だが、何としてでも皇族と縁戚関係を結びたいらしく、宴席には連れてくる、宮殿の催しにも連れてくる、定期的にあいさつにも連れてくる。しかも、礼儀を失するほどでもない微妙な隙間をついてくるため、完全にはねつけることは出来ずじまいだ。

特に邪魔というほどでもないため、適当にあしらつてきたが、その光景を目にしているはずのフュランが知らないということが信じられない。

アルバーンは呆れながら諭すよつに言つた。

「お前はもう少し周囲の人間をよく観察した方がいい。それに、心

遣いは嬉しいが、すでに皇妃にする娘は決めている。もう少ししたら紹介するから、それまでは余計な気を回すな

「えっ、決めている……では、ついに陛下に家族が出来るんですね！ それはおめでとうございます。ついに愛する方を見つけられたのですね、陛下。側に誰かがいてくれるってすごく素適なことです、ああ、早く会いたいなあ。いつ紹介してくださるのですか？」

フェランは無邪気な笑顔を浮かべて訊ねた。

「そのうちな……」

アルバーンは疲れ気味にそう返して、ふと思つた。

家族。

アルバーンのこれまでの人生には、家族や愛という単語は全く存在する余地がなかつた。

母は、遠くから連れてこられたある特殊な生まれの一族だつた。彼女には愛するひとがあり、引き裂かれて無理やりここへ連れてこられたためか、アルバーンを見るたびに表情を固くした。彼女は息子を産んだことを妬まれ、他の側妃に殺されてしまった。最後までアルバーンに笑顔を見せてはくれなかつた。

後宮に残されたアルバーンは、最も年少の皇子であつたせいか無視された。時々は暴力も振るわれ、弱いままでは虐げられるだけだと判断し、剣術と体術に磨きをかけた。そのおかげもあり、暴力を振るわれることはなくなつたが、次に待つていたのは暗殺者の襲撃と、毒の混じつた食物だった。

その頃だ、皇帝が崩御し、国が継承問題で荒れ始めたのは。例え力の弱い皇子でも排除しておくに越したことはないと判断されたのだろう。一度毒を盛られてからは、信頼出来るものしか口にせず、会食の席では毒味を置いた。

アルバーンは母から受け継いだ強靭な肉体があつたから、毒味などなくとも済んだのだが、その存在は、毒を盛った者に対して、こちらは気づいているぞという意志表示でもあったのだ。

ありがち。あまりにありがちで汚れきつた富廷。

その中で、醜いものばかり見て育つたせいか、人間など腹の中が腐りきつた肉塊だとしか思えなくなっていた。それならば、まずは手近なものから始末してしまおう……。

肅清とでも言つのだろうか。汚濁の降り積もつた富廷を、血で洗い流すような心持ちで、アルバーンは彼らがひた隠しにしてきた罪を暴きたて、次々と処刑していったのだ。それこそ、処刑場が一日たりとも乾くことなどないのではないか、と思われるほどの親族や知己の首に、斧を振り下ろさせた。

従わないものも容赦なく殺した。

ひとり死ぬたびに、国の機能が正常に戻つていく。それを見るにつけ、心はますます冷えて行く。

その中で殺さなかつたものがいる。比較的遠い縁戚は生かしたものが多いが、父たる皇帝の血を引くものの中では生かしたのは、ただふたりのみ。うち、最も近しい血縁者がフェランだった。彼は、ア

ルバーンにとつての異母弟だ。

ただし、母の出自が奴隸階級であるために、帝位継承権はない。

アルバーンが見出すまでに、この宮殿で小姓として使われていたのだ。曲がりなりにも、皇帝の血を引く子どもをそのままにしておくわけにはいかない。そう判断し、貴族の位を譲り、徹底的に勉学と武術を教えさせた。

成長した今は、主に宮殿での大きな催しや、神事といった行事を司る内務官として働いている。また、宮殿内に部屋を譲りられており、皇子として扱うように徹底させていた。

だが、彼はそれになかなかなじめないようだった。いつも恐縮したように身を縮こまらせている。

アルバーンにとつて、フランはふしきな人間だった。下層で虐待されながら暮らしてきたというのに、その笑顔にはまるで屈託がない。もっと、歪んでいたり、恨みを抱えていてもおかしくはないところだ……。

「はい、それでは楽しみにお待ちしております。では陛下、仕事でお忙しいところをお邪魔して申し訳ありませんでした。失礼します」

「ああ」

礼拝して歩き去つていく弟の姿を見つめながら、アルバーンはためこんだ息を吐き出した。少し離れた場所から様子を見ていたベルナルドが、可笑しそうに声を掛けてくる。

「そんなに緊張しなくても良いでしょうに。弟として見られないなら、臣下として扱えばいいでしょうが。他の官吏に対してはみんなに好き放題言つぱりしくもない」

「そういう訳にもいかないだろ。フロランの態度はどう見ても他の官吏とは違う……と言つて、兄であることを求められても困るが、突き放す理由がない」

アルバーンは素つ氣なく言つて、また執務室の中へと戻つた。ベルナルドは中まではつてこない。また警護に戻つたのだろう。ペンを手に取り、ふと思つ。

もしかしたら、フロランが自分に望むよつて、アルバーンもまた、レティシアに望んでいることがあるのではないうか。それは、ただ夜の生活をともにする存在というだけではないものだ。

「……正直に言つしかないのだろうな」

わがままであることはわかつてゐる。彼女を苦しめる結果になることも理解してゐる。だが、いくら求めてはならないと言つて聞かせても、心は叫ぶのだ。思いを叶えたいと。

アルバーンは口端を上げて、顔を歪めた。  
泣き笑いのような表情になる。

この国の皇帝になると決めたのも、ある意味では自己満足からだ。腐つたものを排除したくて全てをはじめた。犠牲も出た。わかつて、見捨てた。心が欲したからだ。人は、望みや本能を満たすために他の存在と争う。何かにすがつても、悪事を働いてでも生き続けて、望んだ姿になることを欲する。

諦めることができないからだ。

諦めたら、それは死んだも同然なのだ。

だから、諦めるのはやめよ。

今までだとし、あいつがやがて出でてきたのだから……。

## 八、午後の騒変

風が吹いて、庭の木々がざわざわと音をたてる。その葉擦れの音は、雨音のように静かに響く。レティシアは目を細めて、その涼やかな音に耳を傾けた。穏やかな午後、レティシアはテラスに厚い布を敷いて、その上に座り、ほんやりと外をながめていた。

こんなふうに、何をするでもなくほんやりと座つていると、世界に自分が溶け込んで染み込んで、消えてしまふそうな気がする。細かい粒子になつて、空気にはまざつて、世界に帰る。そんな自分を想像して、ふつとほほ笑んだ。

肌にまとわりついて重い暑さを感じつつ、レティシアは晴れた空を見た。

「この国は、レティシアの故郷よりも南にあるため、日射しが強く、風景がかすんで見える。遠くから、樂士の奏でるクエルダの音色が聞こえてきた。かき鳴らされる弦の音色が葉擦れと混ざり、独特的の空氣を演出する。

「この宮殿には、側妃たちを退屈させないために樂士が雇われていた。彼らはここへ入る際は完全に顔を隠される。その上で、宦官兵や女奴隸兵に見張られながら演奏をするのだが、響いてくる音色は美しい。監視も隠しものともせずに美しい音色を奏でることのできる彼らを、レティシアはひそかに羨ましく思いながら耳を傾ける。

昨夜、珍しくアルバーンは来なかつた。

レティシアは、そのことになぜか寂しさを感じている自分に気づいた。時にはぐっすりと眠りたいと思っていたのに、かえつてよく眠れなかつたのだ。

「良くないわ……いずれは、終わるのに」

どうせ一時の寵愛だとわかつてゐる。夏の夜の、ほんの一時の気の迷いだ。レティシアは自分の身に起つたことについて、そう考えていた。

嫁に行ける年齢になつた頃、母に言われた言葉がある。

「男の人は、ひとりの女性では満足しないものよ。最初のうちは優しくても、世継ぎを産めばもうそれきりでお終いになつたり、若さとともに美しさを失くせば興味を失うわ。

やがては、外に美しく若い愛人を囲つたりするでしょう。そうなれば私生児の問題も出てくる可能性があるのよ。地位の高い男の妻にはね、見て見ぬふりをする能力が求められるのよ。

だからね、夫となる男性には必要以上に愛情を抱いたりせず、「友人のように付き合いなさい。それが一番良い関係を築けるコシよ

少女の頃から恋愛詩などを好んでいたレティシアにとつて、それは悲しい言葉だった。結婚には、夢も希望もないのだと、何もはじまらないつから釘を刺されたのだから。けれど、少しづつ成長し、使用人たちや知り合いの夫婦を見るにつづけ、母の言葉が真実だと痛切に感じるようになつた。

結婚に夢は見ない。楽しみは現実の生活は違う場所で見出した方が良い。

だから現実的に考え、レティシアはここに来ることを選んだのだと。頼まれたから、押しつけられたからではなく、自分の意志で。

「大丈夫……あつと、御子さえ宿つていなければ」

言い聞かせるようにこつぶやいたときだつた。突然音楽がやみ、悲鳴のようなものが聞こえたのだ。レティシアは思わず立ち上がり、部屋の扉を見た。その向こうで、誰かが誰かにすがるような声がある。何が起こつたと言つただらつ。

しばらく困惑気味に扉を見つめていると、興奮したエルバが入ってきた。表情はものすごく嬉しそうで、してやつたと言つのような優越感すらにじんでいる。

「レティシア様！ ちょっと、すこしこことになりますよ、今、珍しいことに陛下がいらしたんですけど、何を言つたと思いますか？ 驚かないで聞いて下さいよ……」

その言葉を、最後まで聞くことはできなかつた。なぜなら、彼女のすぐ後ろに、アルバーンの姿があつたからだ。しかも、驚いたことに、男性の護衛を連れている。しかも重官という訳ではなさうなのだ。

エルバはぎょつとして、すぐに脇に避けて立礼した。レティシアは茫然と彼女と、アルバーンと彼が連れてきた護衛の青年、文官らしき青年、他にも地位の高そうな人々を見て、恐怖に駆られた。

「レティシアには私から伝える。ベルナルド、ここから人払いをし、令嬢がたを送り届けてこい」

「はい」

ベルナルド、と呼ばれたたくましい青年は一瞬、物色でもするようレティシアをじっくりと眺めて、口もとをゆるめた。意味はわからないが、レティシアは嫌な気分になつた。だが、彼はすぐに皇帝の命令を果たすべく他の衛兵を連れて歩き去つてくれたので、レティシアは少しだけ安堵した。

「フェラン、彼女がそうだ。北領バルビエーリを治めるカナバル家の娘で、年齢は二十三。お前と大して変わらないな」

「そうなのですか。初めまして、レティシア様、いえ……もう皇妃様とお呼びした方が良いかもしませんが、僕はフェラン・エスクレドと申します。これから婚儀などについてのご相談にお伺いするかもしませんので、よろしくお願ひいたしますね」

優しげな青年、フェランは、ふんわりした笑顔を浮かべて自己紹介をした。

レティシアは、彼の言つた言葉の中に混じつっていた「皇妃」「エスクレド」「婚儀」という三つについて考へ、ひとつだけ気づいた。そうか、彼が親族の中でアルバーンが生かしたたつたふたりのうちのひとり、異母弟なのだ。確かに、顔立ちや骨格に似たところがある。

ちなみに「エスクレド」とは現在の皇家の名前だ。

だが、他のことについてはさっぱりわからない。レティシアは、とりあえず「はい」とだけ言つておいた。どう答えたらいものか迷つたが、あまりにも不明なことばかりで言葉が出てこない。

すると、アルバーンの背後から叫び声がした。

「なぜですか陛下！ どうしてわたくしたちを捨てるのです！ 皇妃になれなくても、ただあなたの寵愛が欲しかつただけですのに！ 残して下さい、お願ひです！」

悲痛な叫びだつた。のどから血が出るような声だ、ヒレティシアは思った。

視線をアルバーンの後ろに向けると、涙を流した美しい側妃のひとりが、衛兵に抱えられて暴れていた。彼女の存在と名前は知っている。確か、父親をアルバーンに救われた大貴族の娘だ。その際に一旦見てから、アルバーンのところへ嫁ぎたいと思っていた。寝所へ召されないのは自分の努力が足りないからだと黙つていたのを思い出す。

まだ、ここに来たばかりのときの記憶だ。なんていじらしい人がいるのかと思ったものだ。そこまでの情熱は、レティシアには決して抱けないものだ。

あの時から彼女は美しかつたが、今ではさらに磨きがかかり、さらに美しくなつていた。彼女は大輪の薔薇だ。その後ろにも、残して欲しいと言う側妃たちの姿が見えた。こうして見ると、どれほど自分に魅力がないのか痛感する。

大輪の薔薇や艶やかな百合に、下に生えている地味な花が勝てる訳もない。

「何をためらつてゐる。別に殺すわけではない、帰宅させればいい

だけのことだ。希望があれば嫁ぎ先も見つけ、持参金は全て返すと伝えておけ」

アルバーンは冷え冷えとした声で言った。青灰色の鋭い瞳には、何の感情も宿っていないかに見え、レティシアは背筋が寒くなつた。胃のあたりが絞られるように痛む。怖い。これが、烈帝と呼ばれる彼の本当の顔なのだ。

「はつ、はい！」

衛兵たちの慌てた声がし、元側妃たちの声が遠ざかる。

「その女は残すおつもりですか！ 何故、そんな見栄えもしない臆病な女なんかにわたくしが……自分の意見すら言えないような、欠点しかない見栄えもしないような娘ですのに！」

レティシアは目を見開いた。自分が、良く思われていないことはわかつていたつもりだった。単純に、毒にも薬にもならない、ただの影だったから、放つておいてもらえただけだ。わかつていても、言葉は鋭い矢となつてレティシアの胸に突き刺さる。痛みで、涙があふれそうだった。

「あ、あの。大丈夫ですか？ 気にすることないですよ」

フヨランの優しい声がなぐさめるよつて言つて。レティシアは首を左右に振り、泣き笑いのような表情で言つた。

「いいえ、彼女の言う通りですか？」

「そんなことはない」

降ってきた否定の声はアルバーンのものだった。レティシアは顔を上げて、顔を良く見た。あまり感情の出ない整った顔。見るたびに、なぜレティシアなどのところへ来るのかと疑問に思つ。目が合うと、注がれた視線が優しいことがわかる。

「ありがとうございます。あの……では私もここを出ていくことになるのでしょうか？」

レティシアは問つた。側妃たちが次々と実家へ帰されているということは、自分も含まれるのではないかと考へたのだ。恐らくアルバーンが直々に会いに来たのは、妊娠の可能性を考慮したことだと思われる。他に、こうして話をする理由が見当たらない。

帰りたくない。

レティシアは思つた。あの家には、帰りたくない。あそこを出るためにここに来たのに、なぜアルバーンは急に側妃を追い出しあげたのだろう。

もしかしたら、正式に皇妃を迎える気になつたからかもしれない。

思いついた答えに、レティシアは胸がずきつと痛むのを感じた。

だが、返ってきた答えは、レティシアの予想を裏切つたものだつた。

## 九、皇帝命令

「いいや、お前はここから出でていかなくとも良い」

アルバーンは静かに言った。レティシアが不安な気持ちで顔を見ていると、その口もどがゆっくりとほころぶ。彼はレティシアの手を取り、逃げるのを許さないと聞いたげに強くつかむ。やや痛みを感じたが、レティシアは動かなかつた。

「お前には、一生ここにいてもらうこととしたからな。フーラン、あれを」

「はい」

フーランは懐から小さな象嵌細工が施された美しい小箱を取り出し、ふたを開ける。中に納められていたのは、ごろっとした指輪だつた。美しい緑色の宝石がはめこまれ、細い金の棒がからみあうように草木文様を形づくる細工の美しい指輪だ。恐ろしく高価であり、しかも古いもののようだつた。値段などつけられないほどの価値がありそうだ。

彼はその箱をアルバーンに差し出す。アルバーンはその指輪を手に取ると、あらうことかレティシアの右の親指にはめてしまつた。指輪を凝視しつつ、レティシアは慌てる。

「あ……あの、これは」

「これは歴代の皇妃が身につけてきた指輪だ」

レティシアは瞠目した。今、彼は何と言つた。レティシアの心臓が、激しく鼓動を打ち始める。動搖して思わずエルバを見ると、彼女の顔は輝いていた。嬉しくてたまらないといった顔だ。

「うそだ。こんなことがあるはずがない。」

「レティシア、一度しか言わない。……私の唯一の妃として、お前を皇妃にする」

レティシアは指輪を見たまま顔を上げられなかつた。これはいつたい何なのだろう。喜んで良いのか、それとも逆に泣いた方が良いのか。口を開け、何か言おうとしても声は掠れ、言葉も明瞭に浮かばない。

ただわかつたことは、拒否権がないということだった。

アルバーンが告げた言葉は、求婚ではない。なぜなら、レティシアはすでにアルバーンの側妃であり、結婚している状態なのだ。だからこれは、命令だ。

「わ、私には……荷が重すぎます」

ようやく言つた言葉は、今にも消え入りそうな大きさだった。

「そりゃうな、だが私はお前以外を妻にする気がない。だから、皇妃として発言し、動いてもらわなくてはならない」

ようやくレティシアは顔を上げ、アルバーンと目を合わせた。どうして、と顔に出てしまつてはいるのはわかつていていた。アルバーンは、珍しくやや困ったような笑顔を浮かべた。

「嫌なのはわかつてゐる、怖いと思つ。だが、こればかりは譲る気はない」

きつぱりとはつきりと彼は断言した。その目には強い光があり、拒絶などしても無駄だと言われているようだった。

レティシアは何か言わなければと思ったが、声が出ない。すると、アルバーンは少し悲しげな表情をしてから、指輪のはめられた手を持ち上げて、その甲に口づけた。彼は少しの間口づけをし続けると、手は放さないままに言った。

「突然の話だ……気持ちを整理する間が欲しいだらう。また、夜に来る。そのときには、私とともに皇妃の部屋へ移動してもらつ。何か要望があれば言え。あまり無理なものでなければ、何でもな」

「は……い」

レティシアがようやくそれだけ言つと、アルバーンは少し嬉しそうに笑つた。その表情に、レティシアは胸がふわりと温かくなつたような不思議な気持ちになる。やがて彼は手を離すと、言った。

「それでは、政務に戻る。侍女官たちは皇妃の部屋にレティシアの荷物を運びこみ、掃除をしておけ。今宵の食事はこちらでとる」

呆然としていた侍女官たちは、慌てて「はい」と答えて礼をし、走り去つて言つた。やがて、アルバーンは最後にレティシアを一目見てから、フェランと衛兵たちとともに立ち去つて行つた。

レティシアは胸の中にわきあがるもやもやした思いとともに部屋に戻ると、まるで糸の切れた人形のように椅子にすわりこんだ。すると、部屋の中に侍女官たちが入ってきて、レティシアを探るような目で見ながら少ない荷物を運び出して行く。

あまりにも少ないので、侍女官長が「これだけですか」と聞いてきたほどだ。

やがて、部屋には備え付けの寝台と家具類だけになり、レティシアは庭を見た。見慣れた風景。死ぬまで、この風景を見続けられれば幸せだらうと思つていたの。こんな形で終わりを迎えるだなんて。

突然の嵐のような変化に、混乱したままため息をつくと、エルバが歩み寄ってきた。

「レティシア様、ついにあたしの言つた通りになつたじゃないですか。念願が叶つてあたしは嬉しいですよ。やはり今上陛下は素晴らしい方です。この後宮で一番きれいな方が誰だかちゃんと気づいてらしたんですね」

「そんな、私はきれいなんかじゃないわ。逆よ……みにくいの。こまでも、皇妃なんて、本当に荷が重すぎる。どうすればいいのか、わからない」

レティシアは泣きだしそうな顔で言つた。

「レティシア様は、陛下に望まれるのがそんなにお嫌なのでですか？」

すると、レティシアの様子に、エルバがそれまでの喜色を弱め、心配そうな聲音で問うてきた。レティシアはその問いにすぐには答えられなかつた。

後宮は皇帝の物だ。後宮の女たちはすべて、皇妃から側妃、侍女、宮たち、下働きの奴隸女に至るまで、すべては皇帝ただひとりの所有物なのだ。皇帝は、彼女たちすべてと夜をともにする権限がある。言うことを聞かなければ、牢に入れられることすらあるのだ。だから、好きとか嫌いなどということは考えてこなかつた。

だが、改めて考えてみる。

「陛下が嫌いという訳じゃないの…… ただ、皇妃という政務にも関わらなければならぬ立場に私が立つことで、陛下に迷惑をかけたり、失望されたり、ここを追い出されたりするかもしれない。それが怖いの」

レティシアは素直に言つた。ここに来たときからずっと、弱い姿ばかり見せてしまつてゐるエルバには、心境をそのまま語れた。彼女は決してレティシアを責めない。だからこそ、弱さを見せることが出来た。頼れる友人だと、レティシアは思つていた。

「それなら大丈夫ですよ。あたしも支えになりますし、わからないことがあれば、それこそ陛下をお頼りになればいいんです。見ましたか？ 陛下の顔を…… あんなに不安そうな陛下は初めて見ましたよ」

それは、レティシアにも察せられていた。命令し慣れているはず

のアルバーンが、レティシアの答えを待つ「ごくわずかの間に一瞬だけ見せた不安。なぜそんな顔をしたのか。レティシアは可能性を考えてみたけれど、それは彼の持つ印象とは「こと」とく食い違つものだ。

「レティシア様、きっと何とかなります。泣いてもいいし、ちょっとくらいは迷惑かけても何とかなります。もしもだめでも、あたしが何か考えますから、ね。さあ、今夜はとびきり綺麗に着飾りましょー!」

エルバは未だ困惑したままのレティシアの腕をとると言った。

「まずは入浴ですね、それから香油でマッサージしてひとつ……忙しいですよ」

「そ、そんな」

レティシアはエルバに引きずられるように椅子から立たされ、気合いの入った彼女の言つ通りにするしかなかつた。逆らう気力など残つていない。

あれこれと世話を焼かれながら、レティシアはこれからのことの一時的に考えないことに決めた。心が不安で焼き尽くされそうになつてしまふからだ。それでも、思考はすぐにそちらへ向かい始める。

あの夜。

ただ花の香りに誘われた小虫のよつて庭こさまよい出た夜。あのときには、全てが決まったのだ。アルバーンの絡みつくような視線に捕らわれて、抜け出せなくなつてしまつたようだ。

でも、どうしてだろう。

あれほど美しくて、強くて、人の上に立つために生まれてきたような人物が、なぜレティシアなどを皇妃にしようと思つたのだろう。生身のアルバーンとは、ほんの少し前に知り合つたのでさほど知つてゐるわけではないが、皇帝としての彼ならば遠くから見てきた。

冷徹な判断を下せる、冷静な人物。

レティシアはそう思つていた。今も、その印象に変化はない……けれど、彼はレティシアを皇妃と決めた。断言するならば、他国の王女やら大貴族の娘の方を選んだ方が今後のためなのだ。彼女らの縁戚や後ろにいる国から援助を受けることも出来るし、逆に小国であるならば皇妃、または側妃として娶つておけば、そのまま人質として使える。

だが、レティシアは有力貴族の娘といつても、比較的貧しい北領バルビエーリを治める領主の娘でしかない。血筋だけなら、特に問題はないのだが、政務に関わることもある皇妃には、芯の強さが求められる。レティシアには、決定的に欠けているものだ。

そんな、将来に禍根を残すような決定をするような人物とは思えない。

夜の相手をつとめるだけならわかる。ただの氣まぐれだったのだと判断すればいい。だが。

やはり、私などでは陛下の足を引っ張るだけ。今夜、ちゃんと言わなければ。私ではだめなのだと……陛下の御為にならないの

だと、言わなければ……。

レティシアは、なけなしの勇気がわいてくるよつこと、ひつそりと神に祈つた。

そして、夜が訪れた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8704u/>

---

臆病な花と孤独な月

2011年10月7日01時35分発行